

## ホエールウォッチング

小笠原諸島の歴史と文化にとって、クジラは切っても切り離せない存在である。1830年に最初の定住者を島に引き寄せたのは、捕鯨船相手に商売をしようという期待だった。日本人が島で捕鯨を始めたのは1863年のことである。国内での商業捕鯨は1988年に正式に終了したが、同年、国内初のホエールウォッチングツアーがここで始まった。

小笠原近海によく姿を現すクジラの中で最も多く見かけるのが、ザトウクジラとマッコウクジラである。ヒレや尾の先端の写真から、一部のクジラは毎年島に戻ってくることが確認された。クジラの写真撮影は、クジラの習性に関する貴重な情報源になっている。

メスと子クジラは年間を通して小笠原近海に定住し、沖合10～30キロメートル付近で姿を見ることができる。潜水するときは空中に尾ビレを真っすぐ突き出し、1,000メートル以上の深さまで潜る。

小笠原はザトウクジラの主な繁殖海域のひとつとなっており、冬場になるとクジラたちがこの一帯にやってくる。最初のクジラは11月下旬に現れ、その数は2月から4月にかけて最も多くなる。優雅な弧を描いて飛び上がり、胸ビレと尾ビレで海面を叩きつける。

クジラは、ツアーボートから見られるほか、陸では父島のウェザーステーションや母島の丘など見晴らしの良い高台から見ることもできる。ホエールウォッチングボートの場合は、運がよければクジラの鳴き声や発声を聞いたり、姿を間近で見たりすることができる。クジラの鳴き声を拡大するため、多くのボートで水中マイクを使用している。

11月に最初のザトウクジラたちが現れると、小笠原ホエールウォッチング協会の建物の正面には、巨大なクジラ型の吹き流しが空に掲げられる。最初の集団が確認されてからその後数週間にわたってクジラたちが次々とやってきて、最盛期になるとその数はとても多くなるため、通常10～15分ごとに姿を確認できるようになる。